

医学英語教育の一環としての模擬国際学会：滋賀医科大学における20年間の取り組み

著者	尾松 万里子, 相浦 玲子
雑誌名	日本生理学雑誌
巻	79
号	2
ページ	28-30
発行年	2017-05
URL	http://hdl.handle.net/10422/00012329

EDUCATION

医学英語教育の一環としての模擬国際学会 —滋賀医科大学における20年間の取り組み—

滋賀医科大学生理学講座細胞機能生理学部門 尾松万里子
滋賀医科大学医療文化学講座英語教室 相浦 玲子

I. 歴史

滋賀医科大学では、1997年に中洲庸子講師（現・静岡県立静岡がんセンター脳神経外科部長）が発起人となって英語教育担当の筆者（相浦）を含むワーキンググループを立ち上げ、医学英語教育を導入し発展させようとする取り組みを始めた[1]。当時は正規のカリキュラムに医学英語の教育が組み込まれていなかったため、講義のない時間を利用してさまざまな講演会等を企画した。その中で、筆者（尾松）が創設から関わってきた「模擬国際学会」について紹介する。

「模擬国際学会」の当初の目的は若手医師・研究者の海外での研究発表を活発化させることにあり、“Let's get used to it!”を合言葉として活動した[2]。英語での発表の公開リハーサルとして口演者を募り、質疑応答および外国人教師や国際学会発表の経験の多い教員からアドバイスを受ける時間を設けた。演者に副学長から小型辞書や実用書[3]を記念品(token)として贈呈した年もあった。その後、医学英語が第3学年の必修科目になったことから、その目的を「国際学会の開会から閉会までを学生に見せて質疑応答を体験させる」と明確化した。

II. 模擬国際学会の実際

1. 演題

短い演題を3題、少し長めの講演を1題、という年もあったが、2014年からは学生の興味と集中力を保つことを考慮して10分間の口演発表を2題とした。筆者（尾松）を含む2名の基礎医学の

教員が口演者と質問者を交代する形式で行い、学生の理解を深めるためスライドの下方に日本語の要約を1~2行程度入れることにしている。

2. 抄録と開催通知

学生には事前に英文抄録を配布する。また、全学メールで「模擬国際学会」のプログラムと抄録を添付した開催通知案内(英文)を送信している。メールを見て他学年の学生、留学生、大学院生、教員が来聴することもある。

3. 予備知識のための講義

2014年から筆者（尾松）は事前に医学英語教育の1コマを用いて「英語のプレゼンテーション」の講義を行い、座長、演者、質問者の決まった言い方を紹介し、体験談を取り入れながら学会の進行がどのように行われるかについて説明している。英語には丁寧語、謙譲表現、敬語表現があること、いわゆる英会話レベルではぞんざいで失礼な物言いになることがあること[4]を示すと、多くの学生は驚き、初めて知ったという感想を書いてくる。また、簡単なグラフをスライドで示し、10名程度のグループに分かれてその場で説明を考え、代表者が英語で発表するという演習も組み込んでいく。

4. 会場設営と学会進行

「本物の学会」の雰囲気を出すため、会場は一番大きい講義室を用い、座長席・次演者席を設けて各通路に質問者用のスタンドマイクを立て、少し照明を落として準備しておく。いつもとは異なる雰囲気に、入室してきた学生の興味をもつ様子がわかる。座長は、筆者（相浦）と外国人教師らが



図1. 第20回模擬国際学会終了後に提出された学生の感想
研究内容に関する質問や英語での感想を記載する学生が増えてきている。

担当し，“Good afternoon!”という呼びかけから閉会まですべて英語を用いて進行している。

5. 質疑応答

質疑応答の時間は十分に確保している。最後のスライドが映されると、聴いていた方の教員（質問者役）がスタンドマイクに並び、座長の指名を受けた後、口演に対する御礼から始まる模範的な質問を試みる。また、聞き逃してしまったかもしれない場合などいくつかのパターンの質問をすることになっている。質問時には国際色を豊かにするために自分が留学していた先の所属などを名乗ることになっているので、学生が面白がり雰囲気が和らぐことが多い。

学生からの質問は、最初と最後の挨拶だけ英語を使えば日本語で質問してもよいとし、手を挙げることを促す。学生から日本語で受けた質問に対しても、演者はすべて英語で答える。時には座長が適当に学生を指名して質問を促すことなどもおこなう。どのような質問に対しても，“Thank you for a very interesting question!”と返して答えているうちに、遠慮がちながらも自発的に手が挙がることもある。2題の口演・質疑応答が終わると、座長による閉会の挨拶、外国人教師からのコメントがあり、拍手で閉会する。

6. 感想文の提出

学生の出席率はほぼ100%であり、最後に出欠記録を兼ねて提出させる感想文(図1)を次年度計画の参考に使っている。最近の学生は、英会話に関してある程度の知識や経験をもつ者が多い。さらに、滋賀医科大学では2年次学士編入制度があることから他大学の既卒者の割合が高く、語学留学や海外居住の経験者、外国の大学を卒業している学生も少なくない。彼らは医学英語教育を軽みする傾向があり、高校から入学してきた学生との間に意欲の差が生まれることもある。しかし、英語での学会発表経験のある者はほとんどなく、学年全体が「模擬国際学会」を楽しんでいる様子が感想文から伝わってくる。

III. 今後に向けて

数年前までは、感想文に「難しかった」や「英語は大切だとわかった」などと一言だけ書く学生が多かった。しかし、最近では「自分も発表して質問に答えたい」や「日本語の要約がなくてもわかるようになりたい」など具体的で未来志向の意見や研究内容に関する質問が目立ち、さらに英語で感想を書く学生も増えてきており(図1)、我々の工夫が報われている感がある。学生にとって、講義をしていた教員が自分の研究を英語で発表し質問に答えている様子を見ることは新鮮で刺激になるようである。

「模擬国際学会」のスタートから20年経ち、2016年11月には20回目を開催することができた。2017年度から実施される「国際基準に対応した医学教育認証制度の確立のためのカリキュラム改革」により医学英語教育は半期だけの科目になるが、今後も自分の研究を英語で紹介する時に相手に敬意をもって誠実に話す医師・研究者の育成に尽力していきたい。

文 献

1. 中洲庸子, 相見良成, 高橋正行, 藤野昇三, 相浦玲子, 今本喜久子, 堀池喜八郎: 医学英語教育ボランティア活動の報告 Starting a Working Group for Medical English Education. *Medical English* 1: 36-38, 2000

2. 高橋正行, 藤野昇三, 中洲庸子, 相見良成, 尾松万里子, 羽田勝計, 相浦玲子, 堀池喜八郎: 模擬国際学会の試み Virtual International Scientific Session. Medical English 1: 39-40, 2000
3. 大井静雄: 国際学会英語表現辞典, 三輪書店, 1998
4. ジェームス・M・バーダマン: ネイティブが教えるマナー違反な英会話, 中経出版, 2013

「教育のページ」は学部学生, 大学院生, ポスドク, 教員などを対象に, 生理学教育に関する取り組みや意見を紹介することを目的としています. 原稿は Web (日本生理学会ホームページ) 上にも掲載されます. 皆様のご投稿をお待ちしています. 投稿規程は http://physiology.jp/magazine/contribution_rule/ をご参照ください.